



**土佐山アカデミー2012学びの場づくり事業
活動報告書**

2012年7月2日～2012年9月22日

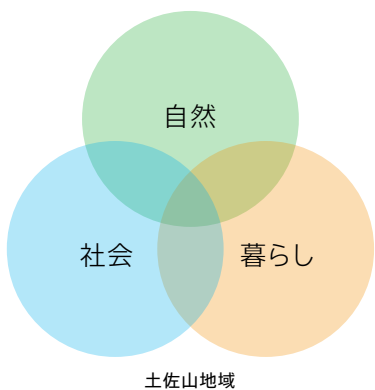
土佐山アカデミーは、自然と調和した豊かな暮らしと
社会のあり方を形にするために、
新たな出会いやアイデアを生み出す学びの場です。



PROGRAM プログラム

土佐山アカデミーのプログラムについて

2012年夏期プログラムでは、全国各地から集った受講生が、土佐山地域の自然や人、伝統や知恵に触れながら、これからの暮らしや社会のあり方について学び、実践しました。1年のうちで最も緑深いシーズンを迎えた土佐山で実施された、多岐にわたるプログラムは、次の5つの柱で構成されています。



- 1 “続いていくこと”の先へ ～サステナビリティ概論～ 6
ただ「持続する」だけではなく、より豊かで、調和のとれた暮らしや社会を創り出していくために、国内外の先進事例に触れたり、先駆的な取り組みを行うゲスト講師の方々とのディスカッションを通じて、サステナビリティの視点を日常的な事例に当てはめる力を培います。
- 2 “自然を師に” ～自然のしくみへの理解～ 12
自然のしくみや生態系、自然と人との関わりなどをテーマとした講義や、森林、河川、海などに実際に出向くフィールドワークを通じて、自然が本来持つ豊かさを引き出し、その価値をさらに高めていくための理解を深めます。
- 3 “暮らしの芸術” ～Art of Living～ 20
長年、大自然と向き合い暮らしてきた土佐山地域の方々を講師として招き、日々の営みの中で受け継がれてきた知恵と所作を学んでいきます。炭焼き、山仕事、土づくり、お祭り、などを実際に体験しながら、自然との深い関わりのある豊かな暮らしづくりや、日本に受け継がれてきた伝統や知恵の新しい活かし方を考えていきます。
- 4 “新しい社会づくりの種探し” ～ソーシャルデザインプロジェクト～ 40
3ヶ月のプログラムを通して、複数の創造的なプロジェクトに挑戦します。土佐山地域が持つ資源を最大限に活かしながら、実際のフィールドを使って、新しい社会づくりの種につながるような探求を繰り返し、自由な発想で新しいしくみを提案し創作することを目指します。
- 5 “現場から学ぶ” ～フィールドトリップ～ 44
土佐山地域内外で先駆的な取り組みを形にしている企業や団体を訪問し、現場の取り組みから学びを深めていきます。また、自然の中へ深く身を投じる時間を通じて、自然の叡智を五感で感じ、人間が本来持つ感性を最大限に拓けます。

SCHEDULE 日程表

		1.サステナビリティ概論	2.自然のしくみ	3.暮らしの芸術	4.ソーシャルデザインプロジェクト	5.フィールドトリップ
9	Week12	サステナブルな働き方 4	プロジェクトデザイン 4	柚子の保存食加工食	畑作業 手入れ・収穫	ライフスタイルデザイン
	Week11		プロジェクトデザイン 3	炭焼き販売体験	ものづくりの現場 2	
	Week10		プロジェクトデザイン 2	川から見る自然 4	炭焼き窯出し・加工	
	Week9		プロジェクトデザイン 1	森から見る自然 5	土から生まれ土に還る	
8	Week8	サステナブルな働き方 3	川から見る自然 3	炭焼き伐り出し・窯入れ		
	Week7		森から見る自然 3・4			
	Week6	サステナブルな働き方 2		パーマカルチャーとは？／土づくりセンター	土佐山虫送り 百万遍	よさこい祭り Wonderなみえ
	Week5	サステナブルな働き方 1	森から見る自然 2	海から見る自然		豆腐づくり
7	Week4		川から見る自然 2	畑作業 畝上げ・種蒔き	旧暦を読み自然を読む	道具づくり
	Week3	理論的枠組み 2	森から見る自然 1		高川虫送り	ものづくりの現場 1
	Week2	理論的枠組み 1	川から見る自然 1	土について栽培計画種について	地域と神社と自然	
	Week1	サステナブルとは？		畑作業 腐葉土集め	神祭	

1.サステナビリティ概論

“サステナブル～持続していくこと”の先へ

コーディネーター：土佐山アカデミー 内野加奈子

サステナビリティの考え方や基本概念を、実例を通じて学びながら理解を深め、様々な要因が複雑に絡みあう問題の本質を捉え、全体から見る視点を見いだしていきます。

ただ「持続する」だけではなく、より豊かで、調和のとれた暮らしや社会を創り出していくために、国内外の先進事例に触れたり、先駆的な取り組みを行うゲストたちとのディスカッションを通じて、サステナビリティの視点を日常的な事例に当てはめる力を培います。

目標とする知識とスキル

- ・サステナビリティの考え方の理解
- ・問題の本質を掴み、全体から見る視点
- ・日本／世界の先進事例の理解
- ・サステナビリティの視点を日常的な事例に当てはめる力

コース内容

第1回 サステナビリティとは？／これまでの歩み

開催日時：平成24年7月4日（水）午前9:30～午前11:30

初回は「サステナビリティ概論」のコース概要説明を兼ねたオリエンテーションを実施しました。

スタディガイドに沿って、より詳細なコース説明と全体のねらいを内野より説明した後、「サステナブルとは何か？」という問いに対して、皆で考える時間を設けました。言葉上の定義と土佐山アカデミーの目指す、ただ続くだけではない「サステナブル」という概念を皆で共有。それぞれの考える「サステナブル」をテーマにディスカッションをし、その考え方が目指すところを見いだしていきました。



ワークシートを用いての、ディスカッションの場面では活発な意見交換が行われ、非常に良い雰囲気の中でコース・オリエンテーションを進める事ができたと思います。定期的にスタディガイドに立ち返りながら、軸をぶらさないようにプログラムを進めていきたいと思います。



第2回 サステナビリティ理論的枠組み（1）

開催日時：平成24年7月11日（水）午前9:30～午前11:30

「ゴミ」という概念そのものを否定し、環境的にも経済的にもやさしく、効率的なシステムを目指す、Cradle to Cradle（ゆりかごからゆりかごへ）という考え方を、様々な事例を交えながら紹介。現在一般的に知られている「エコ」に象徴される、「自然に悪くないもの」だけではなく、これからの時代は「自然に良いもの」をつくってい

く必要がある、という事を理解した上で、土に還る素材を使った製品の開発や、自然の仕組みを最大限に活用した工場づくりなど、全ての素材が循環する仕組みづくりの重要性を学びました。

「ゴミ」を減らす、という考え方ではなく、ゴミという概念そのものを無くす、という発想は非常にシンプルで明快、かつ新鮮なものであり、受講生もここから多くのインスピレーションを得られたのでは無いでしょうか。机上の空論ではなく、世界で実際に行われている事例を通して見る事で、アイデアや工夫次第で確実に理想の社会に一步近づける事を実感できました。

第3回 サステナビリティ理論的枠組み（2）

開催日時：平成24年7月17日（火）午前9:30～午前11:30

サステナビリティについて考えるひとつのきっかけとして、ものが作られ、消費される際の、原材料の原産地から、製造加工、販売現場までの製品供給の流れを追う「サプライチェーン」の考え方や、サプライチェーン全体で消費されるエネルギー量、廃棄物量、水使用量、二酸化炭素排出量を追跡する「環境コスト・トータルコスト」の概念、さらに、原料採取→製造→流通→使用→廃棄にいたるまでの全ての段階を、科学的、定量的、客観的に評価する「ライフサイクル評価」の手法について取り上げました。



また、人間が自然界から得られる恩恵を、サービスと捉え、その価値を可視化・再定義する生態系サービスの試みについて、「持続可能な発展のための世界経済人会議」で発表された生態系サービスの定義を取り上げながら、ディスカッションを進めました。生態系サービスの考え方は、私たちが生態系にどのように依存し、影響を与えているのかを体系的に評価するツールであり、私たちがいかに多くの恵みを自然から受けているかを考える事によって、人間が自然の一部として存在するためには何が必要なのかも見えてきます。

第4回 サステナブルな働き方（1）「半農半X」

開催日時：平成24年7月31日（火）午前9:30～午後16:00

ゲスト講師：半農半X研究所 塩見直紀さん

生まれ育った京都府の綾部市で、地域に根付いた暮らしと、「半農半X」という、農をしながら自分なりの生業を立てるとい、新しい生き方・働き方を提唱している塩見直紀さんをお招きし、これからの暮らしと仕事の関係や自分なりの「X（天職）」の見つけ方などについてのお話を伺いました。



塩見氏のこれまでの活動をご紹介頂く中で、「小さな農」「コミュニティ」「持続可能性」「ミッション」等の様々なキーワードが挙げられましたが、それらが紡ぎ合わさって「半農半X」という新しい考え方が生まれてきたという経緯が大変良く理解できました。後半はワークシートを用いたワークショップ形式で行い、各自の興味や強みを共有する事によって、それぞれの「X」を見出す事を試みました。

「半農半X」という考え方を、自らの暮らしの中で実践し、広くは世界へと発信されている、塩見氏の行動力に学ぶところは大きく、受講生からは「これからの生き方・暮らし方を考えていく上で、大変勉強になった」という声も聞かれました。

第5回 サステナブルな働き方(2)「ナリワイを作る」

開催日時:平成24年8月8日(水)午前9:30~午後16:00

ゲスト講師:LLPナリワイ代表 伊藤洋志さん

個人レベルではじめられ、自分の時間と健康をお金と交換するのではなく、やればやるほど頭と体が鍛えられ、技が身に付く仕事をナリワイ(生業)と定義。「ビジネス」でも「ワーク」でもなく、「趣味」でもない。DIY・複業・お裾分けを駆使した「ナリワイ」のタネを生活の中から見つけ、1つ1つを自分の小規模な自営業として機能させ、それらを組み合わせることで、「働くこと」と「自分の生活」を近づけることを提唱する、伊藤洋志さんを講師にお迎えし、「ナリワイ」を創出するきっかけを探りました。



何か困ったこと、疑問に感じた事に対して会社、企業に任せるのではなく、自ら技術を身につけ、作り出して問題を解決してしまおう、という伊藤さんの考え方はまさに「仕事」と「暮らし」の一体化を目指す土佐山アカデミーの方向性と同じであると感じます。「仕事」や「お金」に対する既成概念を壊し、同時に働く事・暮らす事を最大限に楽しんでいる伊藤さんの姿勢と行動力は、非常に新鮮で、受講生にとっても刺激的な経験になったのではないのでしょうか。

**第6回 サステナブルな働き方(3)「地域で仕事をつくる」**

開催日時:平成24年8月21日(火)午後14:00~午後16:00

ゲスト講師:NPO法人グリーンバレー理事長 大南信也さん

世界中からアーティストを受け入れて実施しているアーティスト・イン・レジデンスや、IT企業のサテライトオフィス進出等により、現在全国の注目を集める徳島県神山町にて、「みんなの仕事」づくりやクリエイティブに過疎化を進める「創造的過疎」をキーワードに活躍されているNPO法人グリーンバレー理事長の大南信也さんをお招きし、地域での仕事づくりや働き方についてお話をしました。

今後の過疎化していく展開を誰もが分かりやすい数値データにまで落とし込み、そこから逆算することで、目標を定めていく。大南さんは、人口減少は避けようがないものとして受け入れ、その上で地域をどう創っていくか、を「創造的過疎」と捉え、その手法や実績を明瞭に語ってくれました。目標を逆算して設定することは、その他の様々なケース・地域において応用できるもので、土佐山にもそれが言えるのではないのでしょうか。地理的にも近いという事もあり、今後も神山町とは連携を取っていききたいと思います。

第7回 プロジェクトデザイン(1)

開催日時:平成24年8月28日(火) 午後9:30~午前11:30

ソーシャルデザインプロジェクトから得たヒント、経験、感覚を基に、チームで価値を創造することに挑戦。地域資源を活かすべく、架空の会社をつくり、事業を練り上げ、発表する段階まで取り組みました。



現代ではビジネスとして、プロジェクト運営していくことへの敷居が下がっており、誰でもできるということを実例を交えながら紹介。その後、資金調達のため実際にどのような方法があるか、株式会社の設立、LLC、クラウドファンディングなどの例を取り上げて説明しました。また、実例として、Skyep、ジレット、REGAの事業が提示され、そのビジネスモデルを分析していきました。ここでの講義を基に、この後チームに別れてプランを練り上げていきます。

第8回(8/29) サステナブルな働き方(4)

開催日時:平成24年8月29日(水) 終日

ゲスト講師:仏生山まちぐるみ旅館プロジェクト 岡昇平さん

旅館の機能をまち全体に分散させることで、地域に新しい人の流れをつくる、「まちぐるみ旅館プロジェクト」に取り組む岡昇平さんを、香川県高松市仏生山まで訪ね、持続的な地域づくりについてお話し頂きました。



先ずはこのプロジェクトの中心とも言える、仏生山温泉を訪問。岡さんのお父さんが掘り当てられた温泉で、設計は建築士としてのキャリアを持つ岡さん自身が担当したそうです。温泉を案内してもらった後、街の中心街を通り抜け、少し離れたところにある、宿泊別棟へと移動しました。この建物も岡さんの設計で、以前は住宅として使われていたそうですが、持ち主が売りに出したため、「ホテル」として貸し出す事を始めたそうです。



この宿泊棟で岡さんを囲んでの意見交換を行いました。岡さんによると、このまちぐるみ旅館プロジェクトは、いわゆる組織というものを持たず、地域住民がやりわりとそれを意識しながら、ゆっくりと10年かけてそれを目指していく、という他にあまり例を見ない地域事業の形態でした。

様々な地域での取り組みに興味を持つ受講生との意見交換も自然と活発なものとなり、岡さんの組織に対する考え方は、多くの受講生の共感を呼んでいました。

第9回 プロジェクトデザイン(2)

開催日時:平成24年9月4日(火) 午後9:30~午前11:30

前回の授業で決められたチームごとに分かれ、ビジネスとして具体的に何をするかを決めるミーティングが行われました。ミーティング終了後、それぞれのチームで5分間の発表時間がとられ、その場での意見交換が進められた。原田さん、吉本さん、藤田さんの班では土佐山内での交流の促進。金さん、伴さんの班では土佐山に外から人を招く仕組みづくり。高田さん、植松さん、岡田さんの班では逆に土佐山から資源や人を派遣する活動を行う、という風にそれぞれのチームで特性が違い、その多様性を垣間みる事ができました。



第10回 プロジェクトデザイン(3)「伝える力」で社会を変える

開催日時:平成24年9月11日(火)午前9:30～午後16:00

ゲスト講師:NPO法人フローレンス理事 岡本佳美さん

ブランディングやマーケティングのプロとして、「伝える力で社会を変える」というテーマの下、一貫した活動をされている岡本佳美さんをお招きして、前半は、誤解されがちな「ブランディング」という概念について、岡本さんのこれまでの活動の紹介を交えてお話し頂き、後半は、実践的な「伝わるプレゼンテーション」についての講義を展開して頂きました。



病児保育のNPOとして、潜在的なニーズを読み取り、全く新たな市場を開拓してきた事業型NPOの先駆けである、フローレンスの設立当初からその運営にたずさわっている岡本さんの話は非常に説得力があり、その経験を背景に語られる、「1ブランド＝1メッセージ」という基本原則や、一般的な「ブランド」という単語の捉え方とは異なる「想い出の総体としてのブランド」という考え方は、これからプロジェクトを立ち上げようとしている受講生や、土佐山アカデミーにとっても学ぶところが大きいものでした。

また、プレゼンテーションのゴールをオーディエンスの感情とし、プレゼンテーション終了後に何を考えてもらいたいのか、どのように記憶に残してもらいたいのか、を常に考えながら、相手に対しての思いやりを持って伝えていく、というプレゼンテーションに対する姿勢の重要性を再認識することができました。この後、受講生はこの学びをもとに、最終発表会に向けて、チームに別れて構想中のプロジェクトについてのプレゼンテーションを練り上げていくことになります。

第11回 プロジェクトデザイン(4)プロジェクト案発表

開催日時:平成24年9月18日(火)午前9:30～午前11:30

受講生が3チームに別れて、架空のビジネスモデルとして作り上げていたプランを、受講生とスタッフの前で発表。内容・見せ方ともに、各チームそれぞれ個性も出て、非常に興味深い発表会となりました。

チーム1(藤田、吉本、原田):ウェブサイトと実際のコミュニティスペースを組み合わせた物々交換のしくみ。

メンバーが土佐山での生活を通して、地域で日常的に行われている物々交換を、例えば高知市内のような地域外の人も気軽に出来るようになれば、埋もれている資源を活用出来るのではないかと考え、このしくみを発案。サイト上だけでなく実際に人々が会う事の出来るコミュニティスペースを土佐山につくり、活用する事で、土佐山地域内外の交流を活性化させる事も狙います。



チーム2(高田、岡田、植松):土佐山にある廃材や天然資源を活用した「モバイルファーム」のレンタル事業。

使わなくなったコンテナや、豊富にある竹でつくったかご等に、土佐山でつくられる堆肥や腐葉土を入れて、移動可能な畑として、主に市街地で生活する人達に向けて貸し出すサービス。

限られたスペースでも作物が育てられ、地面を直接耕さなくても良い事からすぐに始められる・やめられる、という利点があります。レンタル料金には、講師料も含まれており、土佐山の生産者の方々や料理の達人から、野菜の育て方・美味しい食べ方を直接学べるのも魅力。また、市街地

の空きスペースを有効に活用でき、緑の少ない市街地に移動農園をつくりだす事もできます。

チーム3(伴、金):土佐山を楽しむ、シニア向け会員制コミュニティ。木に触れ、それで何かをつくりたい人は多くいるが、街の生活では場所も道具もなかなかありません。そんなシニアに向けて、自由に使う事のできる木工所を開設するという事業です。会費と使用料金を募り、土佐山内に作業スペースを確保します。木工だけでは無く、土佐山の暮らし全般をエンターテインメントとして、思い切り楽しむ事のできるプログラムも用意し、地域との交流を深めていきます。



3チーム共通して、土佐山にある資源を利用しながら、本当にゼロベースで自由に事業を考えることができていました。このような発想は土佐山の外から来た人間でないとできず、こういった発想をどんどんと、学びの場としての土佐山アカデミーが引き出していくことが出来たら、少しずつ変化が生まれてくるのではないかと思います。今回の発表では、スタッフも含めた参加者全員で審査をし、その結果チーム2の事業案が最終発表会で行うプレゼンテーションに選ばれました。



第12回 サステナブルな働き方(5)「生きるように働く」

開催日時:平成24年9月20日(木) 終日

ゲスト講師:日本仕事百貨 中村健太さん

日本仕事百貨は、「生きるように働く仕事探し」をテーマに、仕事を探している人と仲間を探している人を繋げる求人サイトです。アカデミーでも言われている、仕事・暮らし・自然という結び付きの中で、仕事と暮らしのつながりを達成するために活動をされています。

前半は、もともと建築を学ばれた後、設計士の仕事や不動産の仕事をされていた、中村さんが、多くのプロジェクトの経験を通じ「プロジェクトに最も大切なのは『器』ではなく『人』」という思いを強く、「求人」の仕事をするようになった経緯や、仕事と暮らしのバランス関係、そして現在取り組まれている活動等、多岐に渡る内容をお話頂きました。

後半は、前半の内容をベースにした、中村さんと受講生との意見交換の場とし、「メディアの作り方」「独立するには」「プロジェクトの始め方」など様々なテーマの下で、それぞれの考えるこれからの働き方について、活発な議論が生まれました。

「今を大切にしながら、隣の人に贈り物をするように、自分ごととして、生きるように働く。」という、中村さんのメッセージは、これからの仕事と暮らしのあり方を考える上で、非常に示唆深いものでした。この日は三ヶ月のプロジェクトの終盤だったという事もあって、受講生の中にはこれから「サステナブルな働き方」が見え始めている方もおり、中村さんとの意見交換は刺激的なものになったと思います。





2.自然のしくみ

自然を師に “Let Nature be your teacher”

コーディネーター：土佐山アカデミー 内野加奈子

「自然のしくみ」では、土佐山地域内外に溢れる自然をフィールドに、五感を使って体感しながら、自然のしくみや生態系、自然が本来持つバランスや調和への理解を深めます。森や川でのフィールドワークや、ツリーハウスづくり、サンゴの海へのフィールドトリップなど、実践を通じて、自然と人の関わりや自然が本来持つ力を最大限に引き出す知識やスキルを養うことを目指します。

目標とする知識とスキル

- ・自然のしくみ／生態系の体験的理解
- ・自然の持つ豊かさを最大限に引き出し、その価値をさらに高める力
- ・自然の一部としての自分自身の役割の認識
- ・深い自然体験にもとづいた自然観

コース内容

川から見る自然

講師：たかはし河川生物調査事務所 高橋勇夫さん

講師プロフィール

高知県出身。長崎大学水産学部卒業。農学博士。1981年から、(株)西日本科学技術研究所で水生生物の調査とアユの生態研究に従事。2003年、「たかはし河川生物調査事務所」を設立し、天然アユの資源保全に取り組む。20年近く川に潜りアユを直接見てきたアユ研究の第一人者。著書に『ここまでわかったアユの本ー変化する川と鮎、天然アユはどこにいる?』『天然アユが育つ川』等がある。

第1回 人と自然の関わり1（講義／土佐山の河原にてフィールドワーク）

開催日時：平成24年7月9日（月）午後1:30～午後16:00

天然鮎の保全活動を通して、河川の流域環境の整備・改善や、生態系の保全といった活動に長年の間取り組まれてきた高橋先生にお越し頂いて、これまでの取り組みや長年の天然アユ復元の取り組みを切り口に見えてきた自然のしくみ、人と自然の関わりのあり方、といったお話をお聞かせ頂きました。その後土佐山地域内の河原（大穴峡）に移動し、土佐山のアユ釣り名人の方が釣って下さった鮎を、高橋先生とともに塩焼きにして食し、川の資源としての鮎のお話を伺いました。



これまで高橋先生には単発の講師としてお越し頂いていましたが、今期は「川から見る自然」と題して、フィールドトリップを含む全4回の授業を担当して頂きました。この日はその初回という事だった訳ですが、講義だけではなく、その後高橋先生と共に土佐山の自然の中で鮎を食す時間を設けた事で、より深い話ができただけではないでしょうか。今後3回ある授業を通して、川に実際に触れ、高橋先生の取り組みをじっくりと学んでいきたいと思っています。



第2回 人と自然の関わり2（安芸川へとフィールドトリップ／畑山温泉訪問）

開催日時：平成24年7月23日（月）午前8:30～午後16:00

この日は高橋先生とともに、安芸市を流れる安芸川の源流域へとフィールドトリップ。安芸川の中流にて河原に降り、川の流れについてや、砂利の運ばれ方、河原のでき方、についての講義を受けました。

実際には川を見ながらの授業は、川の流れや河原を構成している石の様子等を観察でき、非常に貴重な時間となりました。高橋先生曰く、この安芸川の中流域の河原はかなり良い状態らしく、普段は何気なく見ている河原でも、見る人に自然を読む力があると、その状態の良し悪しを判断できるのだという事を再認識させられました。それができて初めて、このような状態の河原を意識的に保全していく事ができるとも言え、今全ての人に求められている力ではないだろうかという事を、河原までの道に不法投棄されていたゴミの山を見て痛感しました。（皆でゴミ袋2袋程のゴミを拾って帰りました。）



その後、安芸川を上流へと上り、畑山という集落で、食肉用土佐ジローを飼育しながら、温泉を経営されている小松靖一・圭子ご夫妻の下を訪ねました。畑山は人口は約60人、平均年齢72歳のいわゆる「限界集落」であり、規模は違いますが、同じ中山間地で源流域である土佐山との共通点も多くあります。この地で生きる事、地域の現状と将来等について、お二人にお話を伺いました。

靖一さんは畑山の出身。畑山に住み続けるために、はたやま夢楽（むら）という会社を立ち上げます。20年ほど前、採卵用として飼育をスタート。しかし、数年後には産卵率の悪さなどから、ふ化した直後に雌雄鑑別で廃棄されていた雄を肉用として飼うことに決めたとあります。現在は高知県土佐ジロー協会の会長を務めています。食肉用に土佐ジローを飼育している生産者はいないらしく、ご夫妻が経営する畑山温泉では刺身も提供しています。新鮮なその味を求め、県外からのお客さんも多いそうです。



圭子さんは愛媛県宇和島市の出身。新聞記者として働かれていた事もあるそうですが、学生時代にボランティア・ホリデーという事業でたまたま畑山に来たことがきっかけで、靖一さんや畑山に魅力を感じ、ここに嫁ぐ事になったそうです。2011年には長男の尚太郎君を出産し、現在は子育てと両立しながら、畑山温泉の若女将として、宿を切り盛りされています。

「地域おこし」と言われる事例は全国に多くありますが、畑山で生まれ育った靖一さんが語るそれは、まさに「地域愛」そのものでした。土佐山でもこのような「想い」に触れる事は多く、単に人を呼ぶ事だけではなく、この「想い」を繋いでいく事が必要だという事を考えさせられます。そう言う意味で、圭子さんが嫁がれて来た事からも見られるように、靖一さんの想いは確実に伝わっていると感じました。

受講生を交えて、今後の地域のあり方等について意見交換しましたが、やはり限界集落と呼ばれる程に、前途が多難である事は否めません。それは土佐山についても同様で、こうした地域間のつながりや外部をいかに巻き込むかが重要になって来るでしょう。最後に、周辺にある廃校と古本を利用した図書館や、ピザ釜等を案内してもらい畑山を後にしました。



第3回 人と自然の関わり3（鏡川／新庄川でのフィールドワーク）

開催日時：平成24年8月20日（月）午前8:30～午後16:00

土佐山から鏡川沿いに下り、鏡川中下流域を視察。ダムによる河川構造の変化、堰堤による生態系への影響を実際現地に訪れ、フィールドワークとして学びました。鏡ダムから徐々に下流へと向かっていき、ダムによる河川の環境への影響を実際に目で見て、確認しながらの講義が進みます。現地を訪れ自らの目で見える事を通して、講義の説得力とが大きく高まっているように感じました。鏡川下流域、高知市内の魚道についての講義を受けた後、須崎市の新庄川へ移動。ここでは高橋先生が手がけた3箇所の堰堤を訪れ、設計段階からの構想や施工後の結果について説明して頂きました。



日本において、近自然工法を発展・普及させる為には、土木技術の知識と自然生態学の知識の両方を複合的に持ち合わせた専門家の育成が欠かせない、と高橋先生は言います。欧州等に比べると、日本の河川工学は複数の分野から研究が進んでいますが、異分野間では専門用語などが通じず、理解が噛み合わないためです。いかなる分野においても、横断的な理解が求められていると感じます。新庄川では、シュノーケルを用いて実際に川に入り、鮎や他の魚を観察する講座も実施。川の水の美しさもさることながら、光を反射する魚達の美しさは格別で、こうした原体験とも言える経験が、川を、そして自然を守っていくのだという事を感じさせられた授業でした。



第4回 人と自然の関わり4（最終ディスカッション）

開催日時：平成24年9月3日（月）午前9:30～午後15:30

前半では安芸市畑山地域を取り上げて、限界集落を持続していくことは可能か？またはその必要性はあるかという議論。後半ではダムの必要性、粗悪な構造で作られた堰を設置することによって起こる弊害が講義されました。前半の議論では、限界集落での収入源や行政機能等についてのテーマの下、熱い議論が交わされました。後半の堰の構造問題の部分では前回同様、多分野に渡る横断的知識を持った専門家の必要性、重要性を感じました。堰を実際に作るのは工学系の分野の専門家が多いですが、それだけでは魚が堰を渡りきれない、無駄な魚道を作ってしまう。生物学の専門家はそれを理解していますが、その2つの分野がまだ相入っていないのが現状だそうです。そこで、両分野に専門性を持った専門家が場を仲介することで異なる2つの分野を歩み寄せ、発展させることができます。そういった多様性のあるものを1つのものに集約させる場がもっと必要であると感じました。



この夏期プログラムでは高橋先生には全4回の授業を担当してもらい、川のしくみやそれに対する人間の関わり方について学びましたが、振り返ってみると、やはり実際に現地に行き、先生の視点で自然を見れた事が一番大きかったと感じます。また、様々な川を訪れそれぞれの特性を理解する事で、川の見方が変わってきたのでは無いでしょうか。フィールドワークを通して得られる、学びを吸収する機会を活かしながら、今後はより活発な議論が出来るような場をつくりあげていきたいと思っています。

森から見る自然

講師：高知県森林研修センター 浜氏拡さん

講師プロフィール

高知県森林研修センターをはじめ、高知県各地で森林ボランティアやリーダー養成に携わる他、高知県随一のツリーハウス指導者として活躍。県下各地のツリーハウス企画、設営を手がける。



第1回 森のしくみ・樹木のしくみ・森の植生

開催日時:平成 24 年 7 月 18 日 (水)
午前 9:30 ～午後 15:30

前半は講義形式で、森林の成り立ちや木の特性、森林における現状の課題等について浜氏先生にお話し頂き、後半は土佐山夢産地パーク敷地内の山林に入り、樹木のしくみや森の植生を学ぶためのフィールドワークを実施しました。

土佐山アカデミーが事務所を置く交流館・かわせみの周辺には、豊かな植生の森林が広がっていますが、普段は足を踏み入れる機会がありません。周りの自然環境を知る事は、それを活かすためには欠かす事ができず、今回の授業ではそれを学ぶ事のできる良い機会になったと思います。

第2回 森の生物・森の植物

開催日時：平成 24 年 7 月 30 日 (月) 午前 9:30 ～午後 15:30

土佐山夢産地パークの敷地内の山林にて、実際に間伐作業を行い、材搬出と皮剥ぎなどを通じて、森や樹木のしくみを実践から学びました。間伐作業は昔ながらの方法で木の質感を感じるため、のこぎりで行いました。受講生にとっては初めての体験で、最初は手こずっていましたが、作業を進めるうちに手際も良くなり、木を切るスピードも徐々に上がっていました。切ったばかりの檜の皮は手で簡単に剥け、檜の美しい表皮が覗くと皆から感嘆の声が上がりました。材が一通り揃った時点で、ツリーハウスの立地を選ぶために再び森の中へ。候補となる木を選び、その形を見ながら、ツリーハウスの設計のアイデアを出し合いました。次回以降に向けて、各自がデザインの構想を練ることになっています。



第3回 森を活かす1

開催日時：平成 24 年 8 月 16 日 (木) 午前 9:30 ～午後 15:30

この日は、ツリーハウスの共同作品の設営を開始しました。ツリーハウスの設営作業を通じて、木の特性や、森での作業の仕方、道具の使い方などを学びます。この日の授業では主にはしごの作成が主な活動となりました。材木を切り、指定された通りに木を削りはめ込んでいく作業は、単にはしごというもののだけでもかなりの労力を必要とされました。しかし、最初は苦戦しながら作業していた受講生たちも徐々に慣れ始め、ゆっくりと作業ペースが上がっていきました。授業後半にははしごは完成し、ツリーハウスの床の土台部分の作成へと取り掛かりました。



第4回 森を活かす2

開催日時：平成 24 年 8 月 17 日 (金) 午前 9:30 ～午後 15:30

前日に引き続いてのツリーハウスの共同設営。午前中はツリーハウス作り班、必要になる檜の皮を剥ぐ班の2チームに分かれての活動となりました。午後は全員でツリーハウスをつくるプロセスを見ておくべきということで、1つのチームに合流し、作業が進められました。午前中の作業で床の土台は組みあがっていたため、床を張っていく作業を進めます。



まず、床に使える材木をつくるため、檜を3mの長さに切り落とし、切った檜をツリーハウスのところまで運び、今度は木をロープで持ち上げるための「ねじ結び」の結び方を教わりました。材は木の上まで順調に上がり、終盤にはインパクトドライバーを用いてボルトで固定する事ができ、ツリーハウスの形が徐々にその姿を現し始めました。



第4回 森を活かす3

開催日時：平成 24 年 8 月 27 日 (月) 午前 9:30 ～午後 15:30

ツリーハウス共同設営の3回目。講義の最初に浜氏さんから、ツリーハウスが完成するまでの全体の流れを確認して頂き、作業に入りました。午前中は前回同様、木材の皮を剥ぐ班、ツリーハウスの現場で作業する班との2チームに分かれて作業を進めます。全てのプロセスを経験するため、前回皮を剥いだ班は現場班に回り、ツリーハウスの床をロープで固定する作業に取りかかりました。午後は全員でツリーハウス周辺での作業を行いました。内容としては、午前中の床の固定に続いて屋根をつけるため、四つ角への柱を設置し終了。ツリーハウスづくりが始まって3回目という事もあり、慣れた手つきで作業に参加する受講生や、ロープ結び等をお互いに教え合う光景等も見られ、山での作業が着実に身に付いている様子を感じ取る事が出来ました。

その後、浜氏さんを初めとする講師の皆さん方に最後の仕上げをやってもらい、ツリーハウスの完成となりました。後日談ですが、完成したツリーハウスは、アカデミーの受講生やスタッフが昼食を取ったり、気分転換をしたりする憩いの場となっています。管理が難しいとされるツリーハウスですが、今後も浜氏さんと連携しながら長く使ってもらえるものにしていきたいと思っています。



3. 海から見る自然

第1回 海というシステム／海と人の関わり

開催日時：平成24年8月2日（木）午後1:30～午後15:00

海という自然の持つ多様な環境の中から、翌日のフィールドトリップで訪ねるサンゴの海に焦点を当て、生物としてのサンゴの生態から、サンゴを基盤に形成される生態系、サンゴの役割や私たち人間にもたらしてくれている恩恵、また人とサンゴの関わりについての講義を実施しました。



サンゴは、イソギンチャクやクラゲと同じ仲間の動物で、石灰質の骨格を作りながら、海中のプランクトンなどを食べながら生きています。体内に褐虫藻という藻類を共生させ、日中は藻類が光合成によって生み出す養分を得て暮らしています。近年問題になっている、サンゴの白化現象は、海水温の上昇などをきっかけに、この藻類がサンゴの体内から逃げ出し、養分を得ることができなくなったサンゴが死滅していく現象です。

講義では他にも、大気中の二酸化炭素の上昇による海水の酸化がサンゴにもたらす影響など、サンゴが持つ独自の生態を切り口に、海というシステムや現代の海が抱える課題などを掘り下げ、海と人との関わりについて理解を深めていきました。

第2回 海の生態系／サンゴの海（横浪林海実験所へのフィールドトリップ）

開催日時：平成24年8月3日（金）午前8:30～午後16:00



サンゴの群集が見事に発達した横浪林海実験所前の海を訪ね、シュノーケルを用いて、実際に海に入りながら、サンゴ礁環境の観察を行いました。横浪林海実験所に広がる海には、約50種のイシサンゴ類や約200種の魚たちが見られることが確認されており、また黒潮によって熱帯の海から運ばれてきたチョウチョウオの稚魚たちが数多く見られることでも知られています。長年、魚類の研究に携わってこられた高知大学黒潮圏科学教授の山岡耕作先生をお迎えし、受講生と共に海に入っていたいただきながら、各スポットで見られるサンゴや魚の特徴などをお話いただきました。

前日の大雨の影響で、海水が濁っていたものの、水深2～3メートルの深さで立派に育つサンゴや、その合間を行き交うベラやスズメダイ、チョウチョウオなど数多くの魚たち、透明な粘液に守られたイカの卵やウニなどを目にすることができ、普段なかなか触れることのない、海水面下の豊かな生態系を間近に体感することができました。土佐山のような源流域から流れる水も、最終的にこうした海的环境下に大きな影響を与えており、現場での体験を、森と川、海の関係についてあらためて理解を深めるきっかけにしたいと感じました。





暮らし自体を芸術に。

コーディネーター：土佐山アカデミー 山本堪

「暮らしの芸術」では暮らしにまつわる様々な技や知恵を学びますが、それらひとつひとつの要素を、単なる「技術」や「行事」として捉えるというよりは、それぞれの要素を暮らしの中でパッチワークのように紡いでいく、という感覚の方が近いかもしれません。その点で「暮らし方」とは様々な要素の「紡ぎ方」であり、全ての人が想像力や創造力を備えた「百姓・ライフ・アーティスト」であるという所以でもあります。

ここでは暮らし全般を「土」・「農」・「食」・「木」・「祭」の5つのカテゴリーに分けて、それぞれの要素を暮らしの中で、どのように紡いでいくのか、を常に意識しながらプログラムを進行していきます。

コース内容

カテゴリー「土」

ここで言う「土」とは「暮らしを支える環境」、即ち風土・土台です。この三ヶ月は土佐山という地域を肌で感じる事。プログラムの中だけではなく、日々出会う人々や身の回りに広がる風景、はたまた毎日の食事やお風呂、といった日常生活に欠かせない行為まで、ありとあらゆる要素がここには含まれています。ゆっくりと自分の暮らしを見つめ直し、豊かな暮らしをつくるために、まずはこの「土づくり」から始めます。

季節の移ろいを感じ、この地に根付く伝統や文化をより深く理解するため、旧暦に基づいた「土佐山百姓日記」を配布しました。内容はなんでも構いませんが、受講生には、日々感じた事や学んだ事をじっくりと考える時間を取るために、人に読んでもらう事を意識しながら、毎日記す事を心がけてもらいます。

第1回 コースオリエンテーション

開催日時：平成24年7月4日（水）午後13:30～午後16:30

オリエンテーションとして、コースの狙いを伝えた後、ここで設けている5つの各カテゴリーについても一つ一つ説明を行いました。土佐山での暮らしの中に散りばめられている様々な要素を紡ぎ合わせるという視点を養ってもらい、プログラム内容や滞在中の生活で学んだものを記すための「土佐山アカデミー百姓日記」を配布した他、土佐山滞在中に実践し、プログラム修了後の生活にも活かしていける「暮らしのガイドライン」を作成するためのワークシートを配布しました。

第2回 暮らしのガイドライン作成作業

開催日時：平成24年7月12日（木）午前9:30～午前11:30

先のオリエンテーション時に配布していた、「暮らしのガイドライン」ワークシートをベースにして、今回は「食」と「住」をテーマに、受講生それぞれのこれまでの暮らし方についてディスカッションを深めていきました。



様々なバックグラウンドを持つ受講生のこれまでの暮らしを共有する事は非常に面白い試みだったと思います。受講生の中には土佐山に住んでいないメンバーもいる中で、プログラム中だけでなく、普段の暮らしの部分でも共有できるものがあれば、三ヶ月の後の暮らしを考える上でも良いガイドラインとなるのではないのでしょうか。このガイドラインをつくる上でのポイントは、無理をしたり、何かを我慢したりするものではなく、楽しんで続けていく事ができるもの。この時点ではプログラムが開始してから数日ですが、土佐山に暮らす事で、既に生活習慣が大幅にシフトしている受講生もいたり、これまでの都市生活では気にしていなかったものなどが見えるようになってきた、という受講生もいたり、それぞれの暮らしの変化を感じ取る事ができました。

第3回 ものづくりの現場1（早川ユミさん・小野哲平さん／香美郡香北町谷相訪問）

開催日時：平成24年7月19日（木）午後13:30～午後17:00

この日は、香美市香北町谷相に移住して来られて以来、「ものづくり」と「丁寧な暮らし」の両方を実践されている早川ユミさん・小野哲平さんの工房兼ご自宅を訪問。土佐山出発前には、限られた訪問時間を有意義なものにするため、事前に受講生全員でお二人に伺ってみたい質問を考え、共有する時間を取りました。

谷相のご自宅に到着してからは、座談会の形で、お互いに自己紹介をし合いながら、哲平さんの、ものづくりに対する考え方や地域との付き合い方、ユミさんの、土地に根付く知恵のお話やものづくりと暮らしの関係性についてのお話を伺いました。見ず知らずの土地に移住してきて、ゆっくりと時間をかけて地域に溶け込んでいったお二人の実体験は、土佐山にやって来たばかりの受講生やスタッフともに学ぶ事が多くありました。地域に根ざした暮らしを大切にしながらも、旅する事も忘れない、という姿勢は受講生の共感呼んでいたように思います。短い時間でしたが、ものづくりと暮らしが、まさに一体となっているような、お二人の生活からしみ出てくるメッセージを感じ取ってもらえたのではないのでしょうか。お二人は、次に繋いでいく、という事も大切にされていて、ものづくりを学びたい、という若者の受け入れ等も行なうなど、私たち土佐山アカデミーとしても非常に勉強になりました。この繋がりは今後も大切にしていきたいと思います。



第4回 土とともに（パーマカルチャーとは）

開催日時：平成24年8月6日（金）午前9:30～午前11:30

森をヒントに、永続的で循環可能な暮らしをデザインし、実践する「パーマカルチャー」の理論を紹介する講義を実施しました。パーマカルチャーの理論はオーストラリアのビル・モリソンが中心となり、1978年に発表したものですが、その起源は100年前のアジアの暮らしだと言われています。その当時の日本の農業は、人や家畜の糞尿、植物の堆肥などを循環利用したり、つる棚を作って空間を立体的に効率よく活用する等、独創的かつ持続可能なものでした。「パーマカルチャー」という語は、パーマネント・アグリカルチャー（永続的農法）とパーマネント・カルチャー（永続的暮らし）の二つが合わさった造語で、この考え方は現在世界中で実践されています。多様性を重視し、地球や人間に対する配慮を重んじるパーマカルチャーの考えから学ぶところは大きく、今回土佐山アカデミーではパーマカルチャーデザイナーの四井真治さんを講師としてお招きしているという事もあって、この授業を取り入れました。



理論を紹介した後は、その応用編として、パーマカルチャーという名前は使っていませんが、共通する理念を持っていると感じられるプロジェクトを紹介しました。その一つがドイツのベルリンで実際に事業化されている、コンテナを使った移動型菜園で、使われず荒れてしまった公共空間を、緑いっぱいの農園へと見事に変貌させてしまったプロジェクトでした。パーマカルチャーが面白いところは、その基本原則を都市生活にも応用し、発展させていく事が出来ることです。今後は都市でもこうした取り組みが広がり、都市と農村とを繋ぐ橋渡しをする事が求められています。ここで紹介したプロジェクトは、受講生による移動菜園レンタル事業案のヒントとなり、最終発表会で発表される事となりました。

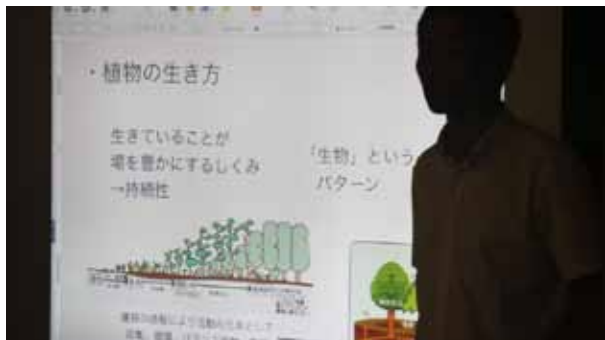
第5回 土から生まれ土に還る、循環するライフスタイル

開催日時：平成 24 年 8 月 30 日（木）午前 9:30 ～午後 15:30

パーマカルチャーデザイナー、ソイルデザイナーとして全国各地で活動している四井真治さんを招いての講義でした。



人が生活していくうえで自然と調和しながら、無理なく持続可能に生活をしていくための知恵についてのお話を頂きました。テーマは「土と暮らし」「生命のしくみ」等を用意していましたが、まずは皆が何について興味があるかという事を知りたいという事で、受講生にどういった話を聞きたいかを聞きました。それを踏まえて、前半は土壌について、特に土壌が遷移していった、草原や森の状態になる経緯をお話し頂き、生産性が一番高まるのは草原の状態であることから、農業では意図的に草原の状態を作り出す事を目指しているという事や、それぞれの過程でどのように空間が使われているのかが講義されました。後半の講義では前半と同様に受講生の質問にも答えながら、四井さんが現在住まわれている山梨県のハヶ岳の家での暮らしを通して、持続可能で自然と調和したライフスタイルを確立するために、実践されている事等を、パーマカルチャーの理論を交えながら紹介して頂きました。



四井さんが提唱する「循環するライフスタイル」の中で一番興味深かったのは、この地球上における私たち人間の生物としての役割を、他の生き物と何ら変わらない、あくまでも一つの「分解者」とする視点でした。そのように考えると、その土地の栄養分を吸収し、その土地に還すという事がいかに当たり前で、且つ現在の社会システムがそうはデザインされていないという事が痛感できます。パーマカルチャーデザインとは、暮らしの仕組みを上手くデザインする事で、生命を循環させる、まさにこれからの社会に求められている知識だと言えるのではないのでしょうか。



第6回 ものづくりの現場2（下本一歩さん／高知市鏡）

開催日時：平成 24 年 9 月 13 日（木）午後 13:30 ～午後 16:00

土佐山のお隣の鏡地域（旧鏡村）で、竹炭を焼きながら、繊細で美しい竹の食器を制作する下本一歩さん。自らの手で建てたという自宅兼工房を訪ね、山で暮らすという事や「ものづくり」についての考えをお聞きしました。ご自身の手でつくられたという炭窯を見せてもらったり、自宅の隣に併設されている工房を案内してもらった後、一歩さんの自宅前の草原にて昼食をとりながら、皆で意見交換を図りました。

炭窯づくりは土佐山の菖蒲地区で行われたワークショップに参加したそうですが、竹細工や炭焼きはほとんど独学だったそうです。初めは生業としてではなく、趣味で始めたという炭焼きでしたが、高知市内のギャラリーに買ってもらったりしているうちに、竹細工の方も

売れるようになっていった、と言います。淡々とした話しぶりからは、つながりがつながりを呼び、トントン拍子であつという間に売れっ子作家になったような印象を受けますが、その道のりはもちろん平坦なものではなかったそうで、やめようとした事も何度もあったそうです。炭焼きを始める前は絵を描いていたそうですが、現在の「ものづくり」においてのテーマは「使えるもの、使いたいものをつくる」。その哲学は作品を見てもひしひしと伝わってきます。



山の中での暮らしについては、「いきなり外からやって来た人にはなかなか難しいかも知れない。中の人達と外からやってくる人達を繋ぐ役割の人達が求められている。」と言います。一歩さん自身は、お祖母さんが鏡の出身という事で、完全に外の人ではありませんが、それでも難しさを感じる事もあるそうです。地域の中で上手くバランスを取りながら、無理せずに生活する事が大切とのことと、受講生の皆さんも同じような事を感じていたように思います。ものづくりにおいても、山での暮らしにおいても「人とものつながり」の大切さを実感させられるお話でした。



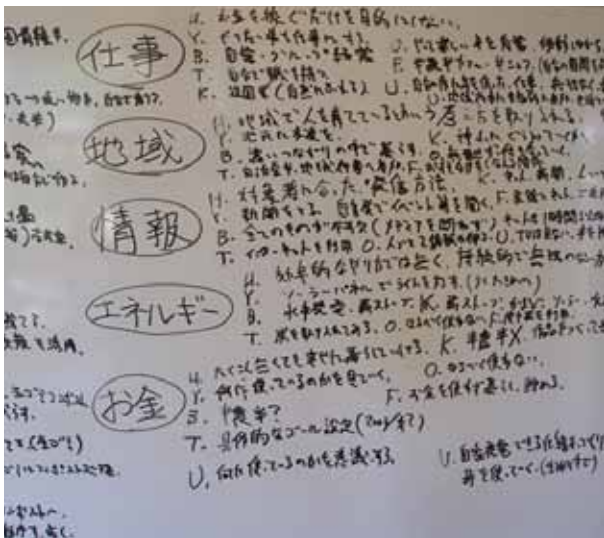
炭焼きは土佐山アカデミーのプログラムにもある事から、竹炭と木炭の違いや、窯の違いについてのお話を聞く事もでき、且つそれを生業にされている同世代の方が身近にいる、という事が受講生にとっては新鮮だったのではないのでしょうか。土佐山と鏡はお隣さん同士ということもあり、今後もこの繋がりを大切にしていきたいと思います。

第7回 ライフスタイルデザイン／暮らしのガイドライン

開催日時：平成 24 年 9 月 19 日（水）午後 13:30 ～午後 16:00

「暮らしの芸術」最後の一枠という事もあり、この時間では、これから土佐山アカデミーのプログラムが終了し、土佐山を離れても、ここでの学びを暮らしの中に活かし、次へとつなげるために、今後の暮らしの中で意識する「暮らしのガイドライン」の完成を目指しました。

最初は全メンバー共通のものを作り上げてはどうかと考えていましたが、それぞれのバックグラウンドや生活習慣が違うために皆が同じものを作り上げるというのは難しい、ということでワークシートに沿って、それぞれ個別に考え、発表する、という形で行いました。



それでも結果としては、土佐山で学んだ文化や、持続可能なものを意識する、という事みんなでも共通しており、講義としてはそれぞれの考えを言い合うことのできる場ができて貴重な時間になっていたと感じました。ここで完成・共有したガイドラインを、各自のこれからの暮らしをつくっていく手助けにして欲しいと思います。

カテゴリ「農」

畑を耕すところから始まって、栽培計画、種について、農具の使い方、日々の野良周り（見回り・手入れ）、そして収穫までの一連の流れを学び、実践します。涼しい時間帯を有効利用するために、早朝に作業を実施する他、毎朝の野良周りは受講生とスタッフで順番に行い、知識や技術だけではなく、暮らしの一部としての「農」を目指します。

第1回 畑の土づくり（落ち葉・腐葉土集め）

開催日時：平成24年7月5日（木）午前9:30～午前11:30

この日は、土佐山夢産地パーク内の交流館前に設けた土佐山アカデミーの畑の土づくりに取りかかりました。先ず始めに夢産地とさやま開発公社の大崎裕一事務局長より、鶏舎の土を参考に用いながら土づくりについての説明があった後、畑の土に有機物を加えるため落ち葉や腐葉土を集めに出発しました。土佐山夢産地パーク内の道路脇や側溝の上を中心に、鍬やスコップを用いて落ち葉を集め、最終的には軽トラ一台山盛りの有機物を集める事ができました。



道路上の落ち葉は長年の間溜まり続けていて、既に土になっている状態の箇所も多くありました。落ち葉を取り除いた場所は綺麗に掃除されたようになり、道幅もかなり広がったように感じられます。自分たちの畑を良くするための行動が、こうして地域の道を綺麗にするという事にも繋がり、まさに一石二鳥となりました。普段は廃棄物として処理されるこうした落ち葉等を、畑の栄養分として活用できるという事を一度体験すると、今後から周辺環境を見る目も変わってくるのでは無いでしょうか。畑の土づくりには長い時間が必要ですが、こうした共同作業も入れば、少しずつ進めていきたいと思います。



第2回 土について・コンパニオンプランツ・栽培計画

開催日時：平成24年7月9日（月）午前9:30～午前11:30

前半は土佐山アカデミーの林による「土について」と「コンパニオンプランツ（共栄作物）」の講義、後半はチームに別れて、畑の栽培計画に取りかかりました。



土とは何か？良い土とは？このような問いから始まった授業は、土の構成物・栄養分についての話から畑の土を良い状態にするための様々な肥料の種類まで幅広く、「土の入門編」とも言える内容でした。「コンパニオンプランツ」についての授業も同様で、植物同士の相性の話から、多様な植物が共栄する畑を目指す事で「モノカルチャー」からの脱却を図るという観念的な話まで幅広いものでした。土佐山アカデミーが持っている在来種・固定種の種を紹介し、外へ出て3パターンに分けられた畑を見学した後、栽培計画をグループに別れて考えました。一旦出来上がっているところまでの栽培計画を各チームに提出してもらい、残りはそれぞれのチームで持ち帰って決めてもらうという事にしました。

この日の授業は「ゼロ・ウェイスト」や「畑作業」を進めるにあたって、土についての非常に分かりやすい導入となった他、実作業への良い足がかりとなったように思います。方向性を明確に提示する事で、共同作業をするにあたっても、自分たちが何のためにこれを行っているのか、を見失わずに作業できるようになるのでは無いでしょうか。

第3回 種について

開催日時：平成24年7月11日（水）午後13:30～午後15:30

土佐山アカデミーの林による、現在市場に出回っているF1種による種子の状況や、古来よりその地域の気候や特性に併せて適応してきた「在来種・固定種」についての講義を実施しました。F1種は異種同士が人工的に掛け合わされて生まれた種で、姿や味が均一であり野菜等の大量生産に向いていますが、その特性は一世代しか引き継がれず、農家は毎年種を購入しなければならなくなっています。又、その均一化された特性により、必然的に流通される野菜の品種は限られてくるため、古来より伝わる食物の多様性を阻む原因ともなっているのが現状です。「在来種・固定種」を保護し、保存する「シードバンク」の活動も紹介し、且つこれからはそれらを単に保存するだけではなく、種に付随する食文化や知恵なども同時に生きた技として継承していかなければならない事を問題提起として皆で話し合いました。



「種の入門編」とも言える内容でしたが、一度種の現状を知ると、日常の中でスーパーや八百屋に並んでいる野菜が以前とは違って見えてきます。それが自分の食生活を見つめ直すきっかけになり、ひいては暮らしそのものを考える事に繋がっていくのでは無いでしょうか。また、ただ保存するだけではなく、生きた文化として継承するために今何ができるのか、を考える事は、種に限った話だけではなく、古来から伝わる伝統文化等について考える時にも非常に重要となってくるという事も見逃せないポイントだったように思います。

第4回 有機大豆の種蒔き（山本優作さん）

開催日時：平成24年7月18日（水）午前6:00～午前8:00

この日は菖蒲地区で有機農業を営む山本優作さんのお招きで、受講生の中から有志を募り、朝早くから大豆の種蒔きへと向かいました。山の中腹を自らの手で開拓され、丁寧に管理しながら有機農業を営む優作さんの圃場は、その前に広がる景色と相まって本当に美しく見えます。既に畝上げされている畑の中に入れてもらい、優作さんの指導のもと、一つの穴には三粒ずつ、それぞれの粒の感覚を均等に保つようにして丁寧に蒔いていきました。



第5回 畑作業（畝上げ、種蒔き）

開催日時：平成24年7月27日（金）午前6:30～午前8:30

この日は実際に畑に出て、畝上げを初めとする、畑作業を実施しました。土佐山夢産地パークの敷地内の畑を手前から、

1. モコモコ堆肥と腐葉土と山土を混ぜた畑
2. 腐葉土を敷き詰めた畑
3. モコモコ堆肥と山土を混ぜた畑

の三区画に分け、3チームに別れて作成してもらっていた栽培計画を元に、それぞれの畑をデザインしていきます。今回用意した作物はほとんどが在来種の、トマト、バジル、シソ、キュウリ、人参、サツマイモ、ネギ、エンドウ豆、黒大豆、ゴーヤ、綿等。（苗も含む）コンパニオンプランツの授業で学んだ事も活かしながら、畑全体





土佐山高川地区からの風景

に種を蒔いていきました。今年の夏は雨が多く、梅雨が明けるのも遅かったため、この時期まで遅れてしまいましたが、三区画それぞれ異なる土で作物の生育状況がどのように変化するかを、良く観察しながら、見守っていききたいと思います。



第6回 土づくりセンター訪問（坂本博さん）

開催日時：平成24年8月6日（金）午後13:30～午後15:30

土佐山における有機農業の起点ともいえる「土づくりセンター」を訪問し、この道二十年の坂本博さんに施設の案内をしてもらいながら、土について、そして地域で生きるという事についてお話を伺いました。

普段受講生も畑作業で使用しているモコモコ堆肥が生成される過程の技術的な説明はもちろんの事、坂本さんが語ってくれた「土づくり」の理念や、土佐山という土地に対する強い想いは土佐山アカデミーの目指す「人づくり」とも共通する部分も多く、非常に良い勉強になりました。



第7回 畑作業（手入れ・収穫）

開催日時：平成24年9月19日（金）午前9:30～午前11:30

プログラム中最後の畑作業となったこの回では、畑の手入れと野菜の収穫を行いました。

土壌環境ごとに三つに区切っていた畑では、野菜の生長速度の違いが如実に表れていて、四井さんにお話しして頂いた「土壌の遷移」を実際に見比べる事ができる程になっていました。特に腐葉土を敷き詰めていた畑は野菜、雑草ともかなり生育が良く、土壌遷移で言えばまさに「森」の状態を連想させるものでした。種を蒔いてからは実際二ヶ月程しか経っていませんでしたが、土の状態によって、ここまでの違いが出るものなのかと、皆驚いており、教材としては非常に興味深いものになったと思います。

しかし、「農」としては、手入れも充分に行き届いていなかった部分もあり、次に向けた課題として引き続き学んでいきたいと思っています。



カテゴリー「食」

私たちの生活には欠かせない、一日三度の食事。私たちの暮らしは、食べる事を通じて世界と繋がっていると言っても過言ではありません。食事を見つめ直す事が、暮らしを見つめ直す事に繋がっていきます。伝統の味を育んできた、地域に根付く知恵や技を学び、食べ物がどこで生まれ、どのように台所まで運ばれ、どうやって私たちの口に届くのか、を意識できる暮らしをつくっていきます。

また、定期的受講生とスタッフ全員で手料理を囲み、ディスカッションができる場として「ランチ・ミーティング」や「ディナー・ミーティング」の機会を設けました。

第1回 豆腐づくり

開催日時：平成24年8月2日（木）午前4:30～午前7:30

自身で育てた有機大豆から、手作りの豆腐を作られている、菖蒲地区の山本優作さんの豆腐小屋を訪ね、豆腐づくりの全行程を拝見させて頂きました。

かまどの薪に火を着けるところから始まるその工程のひとつひとつを、熟練された手付きでこなしていく優作さん。簡単そうに見えますが、とても難しい技らしく、最初は失敗の連続だったと言います。途中で絞りたての豆乳を頂きましたが、その濃厚でほんのりとした甘みを感じさせる味に、受講生は皆大感激していました。あっという間に、豆腐が出来上がり、優作さんの私設公民館「和み庵」にて頂きました。豆腐もまた、非常に味が濃く、大豆そのものの味がしっかりと生きている、まさにほんものの味でした。



第2回 保存食・柚子の加工食品について（猪谷八知代さん）

開催日時：平成24年9月18日（火）午後13:30～午後16:00

菖蒲地区にてジャムやその他ゆずの加工品を製造している猪谷さんの自宅兼加工場を訪問し、保存食や柚子の加工についてのお話を伺いました。

猪谷さんは三重県に在る愛農学園にて農業について学んだ後、土佐山へと帰郷。無添加にこだわり、素材そのままの味を活かした商品の製造を行っています。小さなころから自然とともに暮らしてきた、土佐山出身者ならではのこだわり。柚子ドリンクや柚味噌、柚子糰子など、試食・試飲させていただいた商品に受講生も納得の表情を見せていました。



カテゴリー「木」

高知県の森林面積は84%。土佐山内だけなら90%を越します。山で暮らすという事は、木とどのように付き合うのか、という事でもあります。時には暮らしの土台を支える家として、時には道具として、また時にはエネルギー源として、木はかつて、私たちの暮らしに欠かせないものでした。この貴重な資源を有効活用してきた先人が育んできた知恵は、自然の神秘と人の叡智の結晶として、今に引き継がれています。土佐山はかつて炭焼きの村でした。この炭焼きを軸として、木の文化を学んでいきたいと思います。

第1回 道具づくり（さいとう工芸さん）

開催日時：平成24年7月24日（火）午前9:30～午前11:30

長年の間高川地区に工房を構え、木工職人として数多くの製品を生み出している、さいとう工芸さんを講師としてお迎えし、斉藤さんの工房にて、日常的に使用する箸やスプーン等の道具づくりの授業を実施しました。

初めに自己紹介も兼ねて、斉藤さんのこれまでの活動や生業としての木工、森林の現状等をお話頂き、作業に移りました。今回用意した道具は彫刻刀と小刀、それに仕上げ用のサンドペーパーです。それらを使って斉藤さんが切り出してくれた、檜スプーンの原型板を削っていきます。なめらかな曲線を描くのは至難の業ですが、木工の経験のある受講生も多く、授業の最後の方には見事なスプーンの造形が姿を現していました。作業は授業が終わってからも続き、家に持ち帰って空いた時間等に完成を目指す受講生や、斉藤さんの工房に相談に訪れる受講生もいたりして、木の道具をより身近に感じてもらえるようになったのではないかと思います。



第2回～6回 炭焼き（高川炭焼きクラブ）

開催日：平成24年8月22日（水）／平成24年8月23日（木）／平成24年8月24日（金）／平成24年9月6日（木）／平成24年9月7日（金）

土佐山高川地区で今でも定期的に炭焼き活動を行っている「高川炭焼きクラブ」の皆さんのご協力もあり、炭焼きの全行程を体験させて頂きました。

1. 山から伐ってきた木を、炭窯に入れ易い大きさに。

山から伐ってきた木々を窯に並べるために、ちょうど良い大きさ・長さに揃えます。太すぎる木は「くさび」とハンマーを使って割っていくという、木の堅さや重さを、体全体を使って感じる事ができる作業です。



2. 木を炭窯の中に並べる。

長さや太さを揃えた木を順番に炭窯の中に運び入れます。炭窯の内部は「ドーム型」になっており、天井の形に添うようにして、隙間が出来ないように並べていきます。



3. 入り口いっぱいまで木を並べたら、石と土で入り口を塞ぐ。

隙間無く木を並べ、入り口付近まできたら、入り口を石と土で塞いでいきます。空気が入る隙間が出来てしまうと、炭が上手く焼き上がらないため、しっかりとやる事がポイントです。



4. 点火してじっくりと窯を暖める。

木を入れた入り口とは別にある、火入れ口に薪を入れ、点火します。窯が湿っている場合もあるので、大体一晩程、まずは煙を通し、炭窯全体を暖めます。



5. 炭火焼のバーベキューを楽しむ。

土佐山産の土佐ジローの肉や、猪肉、野菜を持ち寄って、バーベキューを楽しみます。作業の後の一杯は格別で、これが炭焼きの醍醐味と言っても良いぐらい。この日はろうそくを持ち寄って、炭窯の隣でキャンドルナイトも楽しみました。



6. 空気の入り方を調節しながら、中の木々に点火。

窯が十分に暖まってきたら、炭窯の中の木々に火を入れていきます。火がちゃんと回っているかどうかは、煙の匂いで分かります。匂いが少しずつ乾燥したように香ばしくなってきたら、火入れ口や煙突にて、微妙に火力を調整しながら、中の木々に火を入れていきます。



7. 点火から約二週間後、窯を開ける。

点火してから三日程したら、炭窯の空気の出入り口を完全に塞ぎ、じっくりと中の木を不完全燃焼させていきます。火がおさまリ、窯が冷えるのを二週間程待ってから、塞がれていた入り口を再び開けます。炭が上手く焼き上がっているかどうか分かる、緊張の瞬間です。



8. 焼き上がった炭を取り出す。

炭窯の中を覗くと、見事に炭となった木々がずらっと並んでいます。中に入って、真っ黒になりながら、この炭を順に取り出し、木肌や断面を注意深く見ながら「樫（かし）」と「雑木」に分けていきます。



9. 窯から取り出した炭を、切る。

取り出された炭を、昔ながらののこぎりや、電動カッターで、出荷用の一定の長さに切り揃えていきます。力を入れすぎたり、押さえ方が甘かったりすると炭が割れてしまうため、繊細な作業が要求されます。



10. 切った炭を袋に詰め、お客さんのお手元に。

切り揃えた炭を隙間無く積み上げ、専用の「土佐木炭」の袋に詰めていきます。この並べ方が、袋に入ったときの見栄えにも影響するので、最後まで気が抜けません。ちょうど 6kg 程詰めて完成です。



夏の炭焼きという事で、日中はかなり暑くなり、作業的にはかなりきついものでしたが、全ての作業を通して体験する事で、昔ながらの炭焼きを学べ、非常に貴重な経験となったと思います。土佐山が炭焼きの村であった時代を実体験として経験している、高川炭焼きクラブの皆さんや夢産地とさやま開発公社の大崎さんには、全行程をご指導頂き、本当に色んな事を学ばせて頂きました。今後は炭の文化、炭の良さを広げる活動にも取り組んでいき、生業としての炭、の可能性も探っていきたいと思っています。

第 7 回 炭の販売体験（はりまや橋商店街金曜日）

開催日：平成 24 年 9 月 14 日（水）午前 8:00 ～午後 16:00

はりまや橋商店街振興組合のご好意で、土佐山アカデミー受講生が自分たちの手で焼いた炭や、その他の作品を、全国唯一の木造アーケードと言われている、同商店街にて毎週開催されている金曜日「はりまや市」にて、自分たちの手で路上販売させて頂きました。



販売前には、西岡燃料株式会社代表取締役社長の西岡謙一さんにお越し頂き、白炭と黒炭の違いや炭の効用など炭の基礎知識についてや、炭ビジネスの今後の展望、また、84 炭プロジェクトや炭炭カフェなどの西岡さんが現在取り組まれている活動、更には商売の原点について、炭のプロとして講義をして頂きました。商いの原点は「対話」という西岡さんのメッセージを噛み締めつつ、その後は実際の販売に移り、炭と七輪を用いて、焼きおにぎりの実演も行いました。



実際、通りすがりのお客さんは炭に興味を持ってくれ、良く足をとめてくれました。そこで自分たちで焼いたという話をきっかけに、どんどんと話が広がっていく事も少なくなく、受講生は炭を介して生まれた繋がりを、実体験として感じる事が出来たのではないかと思います。そうしたお客さんとの対話の末、商品が売れると本当に嬉しく、商いの原点を垣間みたような気がします。



結果的に一輪挿しのインテリアとして展示していた桎炭のバラ売りが最も良く売れ、合計の売り上げもかなりありました。今後は炭本来の燃料としての役割を見直し、需要を開拓していく活動や販売戦略まで取り組める事が出来ると、可能性がひろがるのでは無いかと考えています。

カテゴリ「祭」

高知県には人口比で見ると、日本で一番多くの神社が祀られています。土佐山も例外ではなく、集落ごとの氏神様を初めとして、至る所に社を見る事ができ、この土地の人々が自然との関わりの中に神を見出し、親しんできた風土を感じられます。人が集い、地域の人々の繋がりを豊かにする場という、神社や祭りの担ってきた役割を知り、この文化を学ぶ事が、地域社会での暮らしの土台となってきます。



第 1 回 夏の神祭参加

開催日時：平成 24 年 7 月 5 日（木）

この日は年に二回設けられている土佐山の神祭の日でした。昔ながらの伝統が色濃く残る高知、土佐山の神祭。この風土を肌で感じるという事と、地域の皆さんが一同に集う良い機会でもあり、受講生は滞在している住居がある各地域の神祭にそれぞれ参加し、これから三ヶ月間お世話になる地域の方々へ挨拶をするとともに交流を深めました。

それぞれの地域の皆さんは受講生一同を温かく迎え入れて下さり、非常に良い交流の機会になったと思います。土佐山アカデミーの受講生が来てくれたおかげで、場に活気が出てきた、という声も聞かれた。高川・平石・桑尾の各地域は日頃からもお世話になっており、今後は土佐山アカデミーとしても、何をどう地域に還元できるのかを考えていきたいと思っています。

第 2 回 地域と自然と神社（和田昭八郎さん）

開催日時：平成 24 年 7 月 12 日（木）午後 13:30 ～午後 16:30

久万川地区の和田昭八郎さんを訪ね、地域の神社や古跡を巡りながら、様々なお話を伺いました。



昭八郎さんは村時代に長年教育長を務めてられていた方で、「土佐山村史」の編纂に携わっていた他、「土佐山人物誌」「土佐山の民話集」等も手がけられています。

東川の若宮八幡様を訪ねた他、民話に伝わる「おさばい様」を巡りお話を伺った他、久万川公民館では地域の皆様とお話をする機会もあり、活気のある交流を図れたと感じました。



普段はめったに聞く事のできない土佐山の歴史や昔の話に、皆興味津々でした。かつてより自然を間近に感じながら暮らしてきた人々の生活の中に根付く、言い伝えはやはり語りつがれるべきものであるという事を再認識しました。このように実際に地域に向いてお話を伺う事は非常に貴重な体験であり、今後もどんどん取り入れていきたいと思っています。



第3回 高川地区虫送り

開催日時：平成24年7月17日（火）午後13:30～午後18:30

悪霊を追い払い、五穀豊穡を祈願する伝統行事である「虫送り」。高知県下でも未だにこの行事が行われている地域は少なくなっています。高川地区では例年通り、今年もお祭りをする事になっていましたので、この機会に皆で参加させて頂きました。



高川の集落の中腹に位置する観音堂に集落の皆さんが集い、大きな声で念仏を唱えながら、大きい数珠を回します。このお祭りのために例年京都からお坊さんに来て頂いているとのことでした。虫送りでは地域の入り口、つまり隣の地域との境界線に巨大な草鞋を掲げますが、この大草鞋も地域の皆さんでつくられたそうで、受講生も興味津々でした。その様子を見た高川の皆さんが、お祭りの後で草鞋づくりを教えて下さるという事になり、急遽草鞋づくりのワークショップが始まりました。もちろん多くの受講生にとって初めての草鞋づくり、縄を「なう」ところから教わります。高川の先輩方に、文字通り手取り足取り教えてもらいながら、草鞋が形になってきました。藁が編み込まれる事によって形作られる造形は本当に美しく、昔は誰もが自分たちで出来る程に覚える事は出来ませんでした。かけがえの無い貴重な体験となりました。

第4回 旧暦を読み、自然を読む（岩井信子さん）

開催日時：平成24年7月27日（金）午後13:30～午後15:30

明治時代に太陽暦に切り替えられるまで、日本で使われてきた旧暦。その旧暦を知る上で欠かせない基礎知識や、旧暦と地域文化との関わりについて、民俗文化研究家で「土佐の文化を守る会」事務局長の岩井信子さんに講義をして頂きました。

土佐山のような中山間地で生活していると、農業を初めとするお百姓の仕事や、地域の祭事等はいまだに旧暦が用いられている事が多々有り、いかに旧暦が風土として根付いているのかを感じる事が出来ます。明治5年11月9日にグレゴリオ暦が導入される事が決定した経緯やその後の混乱、また日本の季節感と旧暦の関係性などを、地域性の感じられる暦の和名を交えながら説明して頂く等、非常に興味深いお話を聞く事ができました。常に季節の移ろいを感じられるような暮らしを大切にす為にも、旧暦は継承し、生きた文化として次の世代に残していきたいものです。



第5回 よさこい祭りの歴史と現在

開催日時：平成24年8月7日（火）午前9:30～午前11:00

10年以上に渡ってよさこい祭り参加し、チームを率いて来た経験のある、土佐山アカデミーの藤島により、高知の夏を代表するお祭りである「よさこい祭り」のこれまでの変遷と現状についての講義を実施しました。

よさこいソーラン祭りを初めとし、今では全国的な広がりを見せているよさこい祭りですが、高知発祥のお祭りです。よさこい祭りがここまで広がった理由の一つに挙げられるのが「自由である事」。「正調」と呼ばれる踊りは有りますが、必ずしもそれが絶対という訳では無く、それぞれの地域の風土に合わせて自由にアレンジが出来るという寛容さでは無いでしょうか。受講生には、常に変化しそして進化する本場のよさこい祭りを、踊り子／運営側として、参加してもらう事により、このお祭りの醍醐味を体感して頂きます。



第6回 土佐山地区虫送り

開催日時：平成24年8月7日（火）午後13:30～午後16:00

高川地区と並んで虫送りの伝統が残っている土佐山地区。この回は、この土佐山地区の虫送りに参加させて頂き、同じ風習でもいかに地域ごとに異なるかという事を見させて頂きました。土佐山地区のお堂は小さく、地域の皆さんはその前にござを敷いて輪になります。太鼓を叩く人と、笛を高く振り上げゆっくりとまわす人を真ん中に、その周りを大数珠が囲い、数珠を数回まわしては止め、念仏を皆で合唱します。初めてだったのにも関わらず、大きい声で綺麗に念仏を唱えられるようになった受講生もいたりして、終始和やかな雰囲気の中進められ、全部で十数回それを繰り返したところで終了となりました。夏休みと言うこともあって、お子さんの参加も多く、地域の賑わいを感じさせるお祭りでした。



第7回 よさこい祭り参加（Wonder なみえチーム参加サポート）

開催日：平成24年8月9日（木）～平成24年8月12日（日）

昨年2011年に、財団法人夢産地とさやま開発公社土佐山アカデミーが主体となり、サマースクールinとさやま（7泊8日）に招待した福島のよさこいチーム「Wonder なみえ」。高知市役所の全面協力により、市役所踊子隊の一員としていくつかの競演場を踊ることができました。依然として原発事故による避難が続いている2012年。普段は全国各地で生活している彼、彼女たちが「本場高知のよさこいに Wonder なみえの曲や振り付け、衣装で参加したい！」「Wonder なみえの『旗』を高知の空の下で思いっきり振ってみたい！」「高知のよさこいに参加することで、ばらばらになりがちな『絆』をもう一度深めたい！」との思いから、Wonder なみえとして単独で初めて高知のよさこいに参加。避難生活を続けながらもよさこい参加を決意した彼、彼女たちの想いと活動を、土佐山の方々とともに、全力でサポートしました。



受講生の多くは踊り子として参加。Wonder なみえより送られて来たDVDを見ながら、数日間に渡り自主練習を積み重ねて来ました。土佐山アカデミーのスタッフは藤島のチーム陣頭指揮の下、サポートスタッフとして踊り子の皆さんを支えました。宿泊先の土佐山菖蒲地区の方々、また温泉をお貸し頂いたオーベルジュ土佐山さんには三泊四日の全行程に渡って大変お世話になりました。連日怒濤のスケジュールとも言える内容でしたが、比較的スムーズにいくつかの演舞場を巡る事ができ、なみえの方々の踊りながらの笑顔を見れた事が本当に嬉しく思いました。今後は来年のチーム参加を目指し、引き続き Wonder なみえと連絡を取り合っていきます。



4.ソーシャルデザインプロジェクト

新しい社会づくりの種探し。

コーディネーター：土佐山アカデミー 林篤志

土佐山地域にある地域資源を実際に使い、テーマ設定された複数のプロジェクトを実施することにより、地域資源の潜在的価値の認識し、社会に必要な新しい仕組みやビジネスの種を見つけることを目的とします。リスクや障壁にとらわれず、プログラムの中でプロジェクトを実施することから、豊かな発想を持って、新たな価値を創造することの経験を得ることを目指します。

コース内容

ゼロウェイスト

主な作業実施日：平成 24 年 7 月 6 日（金）／平成 24 年 9 月 20 日（木）

Waste = Food

日本の年間生ゴミ排出量は約 1940t。ほとんどが焼却か埋め立て処分とされ、処理コストや埋立地の不足など社会問題となっています。ゼロウェイストでは、一般家庭廃棄物（生ゴミ）を回収して、複数の方法で堆肥化することを実践しました。生ゴミが発酵して土に戻るまで、どれだけの時間とプロセスが必要なのか体感し、そこから生まれる土や社会的価値を思索していきます。

ミミズ、米ぬか、モコモコの 3 パターンでコンポストを作り、そこで生ゴミを堆肥化する事によって、「ゴミ」を「資源」として活用していこうという試みです。まず最初に、コンポストの枠組みと屋根づくりとなりました。3 チームに別れて地面をならし、柵を並べ、屋根用の柱を立てた。最後に生ゴミを搬入し、そこにチーム毎に米ぬか、ミミズ、モコモコを加えて「ゼロ・ウェイスト」堆肥づくりがスタートした。枠組みを作るところから始めるという事を考えると、かなりの作業量でしたが、皆で作業をするとかなり早く完成したように感じられました。その後はこの日準備したそれぞれのコンポストの経過を見守りながら、管理をしていきました。

三ヶ月間の中の途中経過として、生ゴミの発酵が思うように進まず、匂いを発する事や、発酵の温度が上がりすぎてミミズの息を妨げる等、さまざまな課題も出て来たが、その都度対処法を考えて来た結果、最終的には、三種類全てのコンポストで、生ゴミはほぼ堆肥化しており、ミミズも多く生息していました。匂いは既に土の匂いになっており、成果を感じることができたと思います。今回は様々な種類のコンポストを実験的に観察する事が目的であった訳ですが、今後はこの学びを応用し、ゴミと栄養が上手く循環する暮らしづくりに活かしていく事が出来るのではないかと思います。



アクアポニック

主な作業実施日：平成 24 年 7 月 13 日（金）／平成 24 年 7 月 20 日（金）／平成 24 年 7 月 24 日（火）

一石何鳥？ 環境負荷を少なく、かつ多くの価値を生み出すには。

野菜の水耕栽培と魚の養殖を統合させたシステムである、アクアポニックの技術を使い、川魚の養殖と野菜の育成を試みました。同時に、同じ作物を露地栽培で育て、発育スピード・味・コスト等の比較を行っていきます。

魚と野菜の水耕栽培の水槽をパイプでつなぎ、それぞれの栄養が循環する仕組み「アクアポニック」に挑戦しました。パイプの動力源には太陽光発電を利用し、持続可能な培養システムの構築を目指します。初回はアクアポニックの仕組みについての説明と、二つの池の整備を実施。その後は、日を追うごとに、水耕栽培で育てる為のケールの育苗、ケール苗を植え付け、池に浮かべる為のベースを設置、片方の水槽に魚を入れる、等の作業を順に行っていました。

この夏は雨が極端に多かったということもあり太陽光発電の稼働率が悪かったという事や、予想以上の水温の上昇といった、様々な課題に直面しましたが、その都度皆で意見を出し合い、解決策に取り組んできました。具体的には、太陽光パネルを追加、二つの池の水を循環させる為のホースの追加、高水温でも生きられる魚／生き物の選択、水草の追加等が挙げられますが、これ以外にも、日常に発生する問題に対して臨機応変に対処していきました。終盤の最終確認時には、魚やその他の生物もしっかりとすみつき小さな生態系が生まれており、ケールも成長をし始めていたので、安定してきている状態となっています。このように改良を重ねながら、また他の地域で行われている事例等も研究しながら、完全に栄養が循環する培養システムを目指していきたいと思います。





スタードーム

主な作業実施日：平成 24 年 7 月 25 日（水）／平成 24 年 8 月 21 日（火）／平成 24 年 8 月 28 日（火）／平成 24 年 8 月 31 日（金）
／平成 24 年 7 月 24 日（火）／平成 24 年 9 月 5 日（水）／平成 24 年 9 月 21 日（金）

最小のエネルギーで最大の空間をつくる。最少の素材で最大の容積を確保する。

竹を使って、ジオデシックドームの簡易版であるスタードームを構築してみました。日本全土に広く分布する事から誰もが手に入れやすく、軽く加工しやすい竹ですが、全国各地で管理されなくなった放棄竹林が増え、問題となっています。この資源の有用性を体感しつつ、自然資源を使った低コストの住環境や空間のあり方を探っていく試みです。



まずはスタードームの構造を理解する為に紙の模型を制作するところから始めました。竹を簡単に編み込むような構造になっている為、良く理解していないと実際の竹を組む時に非常に困難な作業となってしまいます。模型が完成したら、実際に土佐山夢産地パーク周辺の山に入って、竹を伐採。軽く見える竹も一本丸ごとでは以外と重く、皆で協力しながら運び出して来ました。次は一本の竹を八等分に割る作業でしたが、これもかなり難しい作業で、なかなかまっすぐに割れてくれません。それでも作業を重ねるうちに、皆自然と竹の扱いに慣れてきていたのが印象的でした。半分の大きさに組んでみた時はしっかりと安定していましたが、実

際の大きさに組んでみるとかなり大きく、僅かな誤差が大きなゆがみを生んでいるようでした。屋根の素材は皆で意見を出し合い、最終的に受講生の発案、伊野町の高岡さんのご協力もあり、土佐和紙が選ばれました。

ゆったりと佇むスタードームは本当に美しく、中に入ると不思議な安らぎを感じます。そこにある竹を数本使用しただけで、この空間が創れてしまう事が驚きで、和紙のような他の素材を組み合わせることで、更に広がっていく可能性も感じます。



薪風呂

主な作業実施日：平成 24 年 8 月 31 日（金）／平成 24 年 9 月 5 日（水）／平成 24 年 9 月 13 日（木）

エネルギー効率の美しさと文化価値創造。

使われずに放置されている五右衛門風呂釜を使って、薪風呂をつくり、風呂に入る。産業革命以降、私たちが使ってきた化石燃料は、地球が数億年かけてつくってきたものですが、人間の凄まじい消費スピードによって、今それらは枯渇しようとしています。石炭は約 164 年、天然ガスは約 67 年で枯渇と予想。その一方、木材は 50 年という短いスパンで育ちます。かつての国の政策により、日本全国で問題となっている人工林（森林資源）を重要なエネルギー資源として目を向けること。木材資源の可能性とこれを現代社会に文化としてどう活かしていけるか、湯船に浸かりながら考えたいと思います。



石を集め、山から土を採取するところからスタートしました。土佐山夢産地パークの敷地内、ちょうど夕日が見えるところに設置場所を構えます。大崎さんに石の組み方を指導してもらいながら、石組みを完成させ、山から採取して来た赤土を練り合わせて、かまどを形作っていきます。デザイン・設計は石の形にあわせながら、その場で意見を出し合って決めました。完成し、薪に火を着けると石組みの間から、ところどころ煙が出て来て、石組み自体が煙突の役割を果たし、上手くお湯が沸かせる事が確認出来ました。





5.フィールドトリップ

土佐山ツアー

実施日時：平成 24 年 7 月 3 日（火）午前 9:30 ～午後 15:00

土佐山や自然を集落の雰囲気を感じ、全体の土地勘を養ってもらうために、土佐山ツアーを実施しました。

土佐山夢産地パーク交流館を出発し、平石にて直売所 BAL 土佐山や高知市役所土佐山庁舎、土佐山公民館、JA 高知市土佐山支所の各事務所を挨拶に廻った後、県道を北へと出発。

高川の集落を通して、高川仁井田神社を見学、その後工石山の月見台や山小屋を見学し、嫁石梅祭りの会場に立ち寄った後、オーベルジュ土佐山へと向かいました。オーベルジュ土佐山で昼食を取った後、スタッフの土井さんに施設の案内・説明をしてもらいながら周辺を見学し、夢産地パーク交流館へと戻り、一日の振り返りをしてこのツアーを終了しました。



午前中は雨が強く、霧が出ており工石山からの景色が眺められなかったのは残念でしたが、大半の受講生にとって土佐山を巡るのはこの日が初めてで、土佐山の大きさを感じてもらえたのではないのでしょうか。また、通りがかりに前日の入校式にも来賓としてご出席頂いていた、土佐山区長会会長の門田博文さんを初めとする、多くの地域の方々にお会いする事ができ、土佐山での暮らしにおける、人と人の繋がりを感じてもらえたと思います。



（株）相愛訪問（永野正展さん）

実施日時：平成 24 年 7 月 26 日（木）
午後 13:30 ～午後 17:00

この日は高知市重倉にある（株）相愛の本社を訪問し、同社社長の永野正展さんにお話を伺いました。環境技術／エネルギー／社会システムの構築、の分野の最前線で実践してこられた、永野さんの経営哲学や教育に対する考え方、そして社会や政治に対する取り組み方など、多岐に渡るテーマでお話を頂きました。



「今求められているのは価値創造であり、手段が目的に勝る事はありません」という永野さんのメッセージは非常に明快で、かつ明確に理論付け、そしてご自身で実践されてきたものでした。私たちの投げかける質問にも真摯に答えて下さり、自然と議論も白熱。永野さんとお話を通して改めて痛感したのは、今の社会に欠けているのはやはり、自分達の未来は自分達で責任を持って創っていくという、確固とした主体性だということです。この事を常に頭に置き、今後の活動に活かしていきたいと思います。



KITOKURAS 訪問（熊谷有記さん／香川山一木材）

実施日時：平成 24 年 8 月 29 日（水）終日

この日は香川県へのフィールドトリップでした。代々続く香川の木材屋、山一木材さんが始めた新しい取り組み「KITOKURAS（キトクラス）」を見学させていただきました。ご案内していただいたのは山一木材三代目の熊谷有記さん。KITOKURAS では無垢の木材を扱うことの大切さ、逆に加工されて作られた「死んでいる」木材を扱う危うさを学びました。本来、木とはその形を変えていくもので、湿度があれば膨らみ、乾燥していれば縮む調湿機能を持っています。また、乾けばどうしても割れてしまうものであり、むしろ割れないものは不自然なものとも言えます。そういった、自然なものを風情として受け取ることができるよう、実物を見せていただきながら話していただいたものがとても面白く感じました。



木の文化が失われる今、次世代に続いていく木と人との関わりを模索すべく、多岐に渡る活動をされており、一同非常に感銘を受けました。熊谷さんは私たちと同世代ながら、三代目としてお父さん、お祖父さんと協力して、日々挑戦されている方で、今後への良い繋がりが作りになったと思います。四国には現在こうした活動をされている若い世代が多く出てきています。そうした方々との交流をより活発にする事で、お互いに刺激合いながら前に進んで行けたらと思います。



横倉山（安井敏夫さん／越知町立横倉山自然の森博物館）

実施日時：平成 24 年 9 月 12 日（水）午前 8:30 ～午後 17:00

この日は越知町の横倉山へのフィールドトリップ。講師は横倉山自然の森博物館の副館長で地質学者の安井先生でした。

横倉山は日本最古の化石を含む地層や、日本で唯一アカガシの原生林が残っていると言われており、他にも安徳天皇潜幸伝説など、歴史、文化、自然全てにおいて貴重な資料の多く残る山です。

午前中には自然の森博物館の見学、午後には実際に横倉山に入り、原生林の観察や史跡めぐりを行いました。現在の日本では見る事が少なくなってしまった原生林は、入ってみるとやはりどこか神々しいところがあり、この山を敬い、植林を進めなかった先人の意志がひしひしと伝わってきました。

山を下った後はふもとの河原にて、地質の違いを観察。仁淀川は石の種類がかなり豊富であり、山との地質の差もかなり感じることができました。地質の話は時間のスケールが大きく、想像力が試されます。石一つにも数億年の歴史があるという、気の遠くなるような、自然の中での時間の積み重ねを考えさせられました。

**入校式／歓迎交流会／卒業展示発表会****入校式**

開催日時：平成 24 年 2 月 2 日（月）午後 13:30 ～午後 15:00

地域の関係者や高知市副市長を初めとする行政関係者を招いた、入校式を開催。事業の主催者である（財）夢産地とさやま開発公社の岩崎昭頼専務理事の式辞で幕を開けました。その後、中島重光高知市副市長からの祝辞、高橋幹博高川地区区長からの歓迎のお言葉、土佐山アカデミー内野からの学生証授与を経て、受講生ひとりひとりの自己紹介の時間も設けました。最後は和田勝美高知市議会議員の音頭により土佐山ジンジャーエールで乾杯し、閉幕となりました。



土佐山アカデミー 2012 夏期プログラムの初日、受講生の皆さんの期待をひしひしと感じた一日でした。メンバー全員が顔を合わせるのは初めてだったという事もあって、最初はスタッフ・受講生ともに、少し緊張した雰囲気もありましたが、入校式が終わる頃になると、皆かなり打ち解けていたように思えます。入校式には、地域の良き理解者の方々にお越し頂き、受講生にとっては、良い土佐山生活のスタートとなったのでは無いでしょうか。

**歓迎交流会**

開催日時：平成 24 年 7 月 13 日（金）午後 18:00 ～午後 21:00

入校式に参加頂けなかった地域の皆様を初めとする多くの方々と、土佐山生活を始めて間もない受講生との親睦を深めてもらう事を目的とし、歓迎交流会を土佐山夢産地パーク交流館大ホールにて開催しました。

地域内外より総勢 40 名程の方々にご出席頂き、大変賑わいのある機会となりました。オーベルジュ土佐山さんにお料理をご用意して頂いた他、多くの地域の皆様に自慢の一品料理をお持ち寄り

頂き、山の郷土料理を始めて見る受講生にとっては貴重な経験となったと思います。中でも注目を浴びていたのが、猪の骨付き肉。最初は驚きながらも、決して都会では味わえないその味を皆さん美味しく楽しんでいました。来場して下さった地域の方々も、受講生に対して積極的に質問やあたたかいアドバイスなどを下さり、貴重な交流の場となりました。



卒業展示発表会・修了式

開催日時：平成 24 年 9 月 22 日（土）午後 17:00 ～午後 21:00

2012 夏期プログラムの最終日という事で、土佐山夢産地パーク交流館大ホールにて、卒業展示発表会と修了式を開催しました。ホールにはこの三ヶ月の軌跡として、活動の様子を記録した写真パネルや受講生が焼いた炭等を展示。また土佐山夢産地パークの敷地内でつくられた、畑、スタードームやツリーハウス、アクアポニックや薪風呂等も自由にご覧頂けるようにしていました。



発表会では先ず初めに、土佐山アカデミーの内野より簡単に今期の活動報告を行った後、発表会に移りました。発表会では受講生がそれぞれ土佐山で得た学びや、提案、これからの方向性等を発表し、最後にチームプロジェクト案として「モバイルファーム・わたりどり」（高田・植松・岡田）による、市街地の空き地を利用したレンタル菜園サービス事業が発表されました。その後、修了証授与に移り、受講生ひとりひとりに（財）夢産地とさやま開発公社の岩崎昭頼専務理事より、修了証が手渡されました。来賓としてご参加頂いていた、中島重光高知市副市長の祝辞を頂いて、閉会となりました。



その後、交流会に移る前に、今夏土佐山アカデミーでインターンをしてきた正木による、地域の皆様と受講生の意見交換ワークショップを実施。いくつかの班に分かれて模造紙に皆で意見を書き込む形式にし、活発な意見交換を促しました。その雰囲気のまま交流会に移り、各テーブルで引き続き意見交換がなされていたように思います。

あっというまの三ヶ月間でしたが、受講生と地域の皆さんはすっかり打ち解けた様子でお話をしていたのが

印象的で、私たちを受け入れて下さり、いろんな場面で協力して下さる地域の皆さんには本当に頭が下がる思いです。プログラム修了後も暫くは土佐山に残るというメンバーも多く、皆これが最後だとは信じられない、素晴らしい場になったと思います。



私たちが目指すもの：

人が自然の一部として生きる文化

そのためにやる事：

自然の一部としての役割を思索し行動する人材を育む



特定非営利活動法人土佐山アカデミーは、高知市土佐山地域を拠点として、以下の三つの事業を活動の軸として運営していきます。

1 学びの場づくり事業
土佐山アカデミーのメイン事業は、各地から受講生を受け入れ、土佐山地域全体を学びの場として、代々受け継がれてきた資源である、自然や知恵、文化から学び、新しい社会への変化そのものになっていく人材を育む**スクール事業**です。

2 つながりづくり事業
地方と都市という垣根を取り払い、人が巡る仕組みをつくる事で地域間の文化交流を促進します。一定期間土佐山に滞在してもらうスクール事業に比べるとより気軽に参加できる短期滞在型の**ツアー／ワークショップ**や子供向けの**キッズ・プログラム**、地域の方々に向けた**講座**などを企画・実施します。

3 文化・社会づくり事業
「社会学一体」の理念のもと、土佐山地域だけでなく社会全体を学びの場にしていくために、文化的・社会的な土台づくりに取り組んでいきます。上映会や講演会などの**イベント**や**セミナー**などの開催を通じて、ここ土佐山で育まれる「自然の一部として生きる文化」を積極的に伝えていきます。

私たちは現在賛助会員を募集しています。

会費（一口1,000円、三口以上）を右の口座にお振込の上、氏名／生年月日／住所／電話番号／メールアドレスを事務局までご連絡下さい。

振込先：

ゆうちょ銀行 店番648 普通預金 口座番号 0048609
特定非営利活動法人 土佐山アカデミー

発行者：

特定非営利活動法人 土佐山アカデミー

MAIL: info@tosayama.org

TEL: 088-895-2033

〒781-3221 高知県高知市土佐山桑尾1856-1

http://tosayamaacademy.org

© 2012 TOSAYAMA ACADEMY

